

越前町上岬地区 ガイドブック

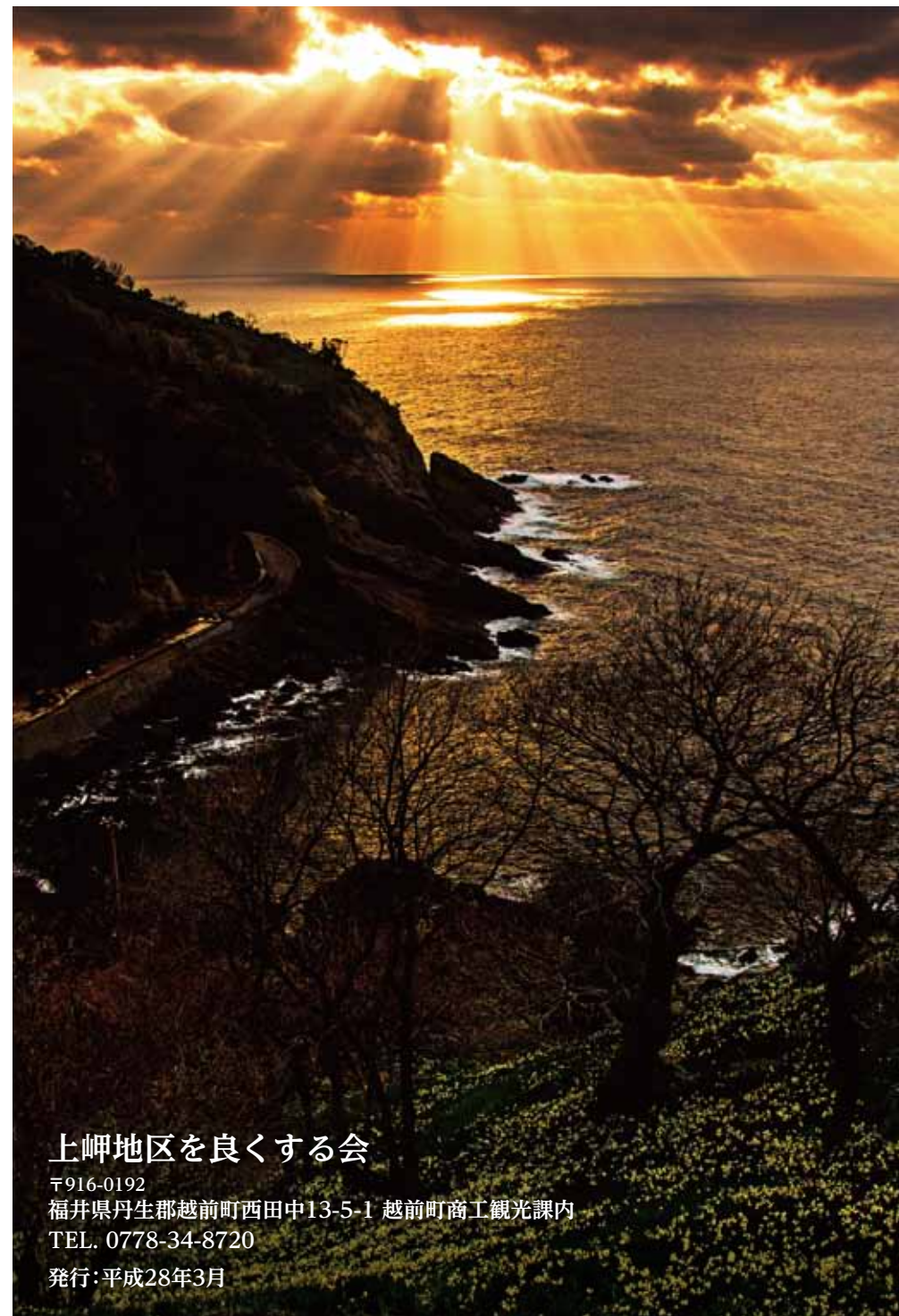
Echizen Kamimisaki Area GUIDE BOOK

たまがわ川
ちがだい
血ケ平
そ左う
なしがだいら
梨子ケ平

昔が今もあるってすごい。



上岬地区を良くする会



上岬地区を良くする会

〒916-0192

福井県丹生郡越前町西田中13-5-1 越前町商工観光課内

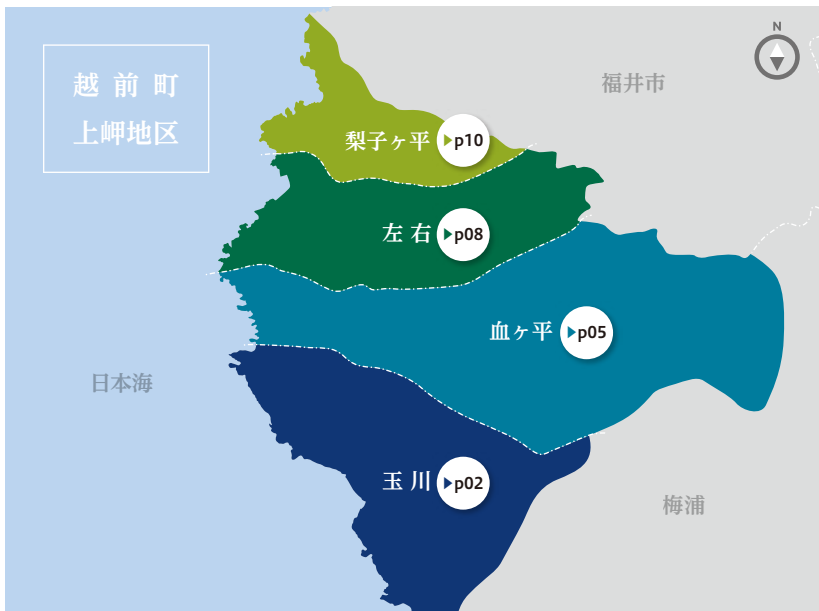
TEL. 0778-34-8720

発行:平成28年3月

越前町上岬地区 ガイドブック

目次

- 上岬地区の沿革 01
- 洞窟観音伝説 玉川地区 02
- 古代の歴史 血ヶ平地区 05
- 漁村の風景 左右地区 08
- 伝説と水仙 梨子ヶ平地区 10
- 上岬地区に伝わる民話 12
- 上岬地区詳細マップ 16



上岬地区の沿革

■上岬村時代からの交流

明治22年(1889)4月、町村制が施行され、越前岬の南西に広がる玉川浦・血ヶ平村・左右浦・梨子ヶ平村の4区域により「丹生郡上岬村」が発足しました。

明治40年(1907)8月、上岬村は四ヶ浦村との合併により廃止。その後、四ヶ浦町、旧越前町を経て、平成17年(2005)2月、織田町、朝日町、宮崎村と合併した現越前町の地区となっています。

上岬村廃止後も4地区を学区とする『上岬小学校』が昭和56年(1981)まで存続したことから、地区間の交流は継続し、上岬の名称は今も人々に親しまれています。

■今も残る昔からの地名

上岬地区の海岸線は『越前岬』から続く海岸段丘で、その地形を利用し、玉川と左右には古くから漁港が開かれ、また、血ヶ平、梨子ヶ平は、山間の平地を利用して人々が住みついてきました。上古から古代、平安時代の文書には既に左右浦、玉川浦、血ヶ平、梨子ヶ平の文字が見られます。

■暮らしを変えた道路の整備

沿岸の細長い平地に集落が点在し、背後に丹生山系の山が屹立する旧越前町では、古来道路の改善が最大の課題であり、玉川―血ヶ平間、玉川―左右間は山を越えて往来していました。しかし、明治維新以降、整備が進められ、東部の山地を通り、梅浦から血ヶ平に至る県道が昭和15年に開通。玉川―

血ヶ平間の血ヶ平線は昭和38年、左右―梨子ヶ平間の道路は同32年に完成しています。

翌33年には県道三国敦賀線(現在の国道305号線)が完成。鳥糞隧道が開通しバスの運行も始まりました。この後に続く高度経済成長とともに人々の暮らしは変化を遂げていくこととなったのです。



上岬小学校(玉川) 明治5年、玉川の民家を借り、玉川・血ヶ平を学区として開校。左右・梨子ヶ平には分校が設けられた。その後、4区を学区とする校舎を玉川に新築。『簡易玉川小学校』、『上岬尋常小学校』、『上岬小学校』(昭和22年)と改称を重ね、昭和56年に『四ヶ浦小学校』に併合された。



遷座・建立された玉川観音(平成6年)両脇には、西国三十三所観音巡礼各寺の観音像33体(複製)が並んでいる。



玉川観音入り口(平成25年)



玉川観音(昭和23年頃)海食により自然にできた洞窟は33㎡余りの大きな空洞で、海中から揚がったといわれる観音様を祀っていた。国道305号線が通るまでは、玉川からは細い道で、他の地区からは船で渡り参拝していた。



玉川海岸(平成10年)平成元年7月の岩盤崩壊事故を教訓に、新玉川トンネルが開通。玉川洞窟観音は移設された。



玉川海岸(昭和初期頃)丸山の高台から見下ろした風景。五本松と呼ばれた上岬から越知山への昇り口があり、岬の向こうには玉川洞窟がある。



開通した岩盤トンネル(昭和30年頃)



海岸道路工事の様子(昭和29年頃)

洞窟観音伝説 玉川地区

■海岸道路開通と崩壊事故

現在の玉川地区は国道沿いに漁港や温泉旅館などが並び、越前海岸の賑やかな一帯となっています。

昭和33年(1958)、区民念願の県道敦賀(三国海岸道路(現在の国道305号線))が開通しましたが、平成元年7月に岩盤崩壊事故が発生。15名の尊い命が失われました。これを教訓に新玉川トンネルが建設され、平成4年(1992)開通。同時に移動を余儀なくされたのが、洞窟の中に安置されていた、『玉川観音(十一面観世音菩薩)』です。

■玉川観音の由来

『玉川観音』の由来には諸説あり、金剛石よりも硬い閻浮檀金エンブダイゴンという金属でできた、三国伝来(印度・支那・朝鮮を経て日本に渡来)の尊像

であると伝えられています。また、仲哀天皇(在位192〜201年)が洞窟近くを船で通られた際に、龍に背負われた像が現れ、「私はこの体をこの地に置き、天下を護持する」と誓ったため、仲哀天皇がこの像を洞窟に奉られたという説、泰澄大師が刻まれたという説、漁師が海から引き揚げたという説も伝わっています。

江戸時代には福井藩主も参詣され、海上安全を祈願する千石船乗組員や漁業者を中心に各地から多くの参拝者が訪れました。慶応と明治期に2回盗難に遭い、幸い戻ってきましたが、その後また失われ、現在は複製が置かれています。

■遷座と西国三十三所観音

平成元年の岩盤崩壊事故後、玉川観音は平成6年(1994)に現在の場所に遷座されました。このとき、地区有志の努力により西国三十



八幡神社 応神天皇を祀り、観世音と弁財天像を安置。浄盛寺誌によると泰澄大師の弟子智光が神功皇后の牛頭悪鬼御退治を講え、神功皇后を祀ったとされるが、いつの間にか応神天が祭神となったという。なお、宝暦8年(1758)の村鑑には正観音社だけが記載されている。



血ヶ平集落(平成12年) 現在は山間の静かな集落だが、海岸道路が開通するまでは、梅浦から左右、梨子ヶ平、越廻を結ぶ交通の要衝で、買い物に訪れる人々が賑わいをみせていた。



浄盛寺(真宗誠照寺派) 慶雲4年(707)、泰澄大師が黄金一寸二分の観音像と、自ら刻んだ阿弥陀如来を弟子の智光に授けて創建。後世に真宗誠照寺派に改宗された。



専楽寺(真宗三門徒派) 創建者は神宮寺の別当を務めた城彦。元は織田庄仙田の『慈光坊』で、真言宗だったが、15代源証が真宗に改宗した。



専長寺(真宗三門徒派) 永正12年(1515)『専楽寺』から分かれて道祐が創建。道祐は『専楽寺』を継ぐ兄であったが、弟に譲り新寺の住職となった。



玉川洞窟観音で灯りとり開催(平成28年) 当会が、平成27年末から実施している『灯りとり』の様子。38体の観音様と40個もの「灯りとり」から広がる光が洞窟の中を一層幻想的な空間に変えている。



越前玉川温泉 6軒の旅館等が立ち並び、日本海を望む雄大なロケーションと新鮮な魚介が人気である。



加茂神社 別雷神を主神とし、天照皇太神と菅原道真公が合祀されている。例祭は10月19日。

古代の歴史 血ヶ平地区

■寺社が物語る山村の歴史

血ヶ平の起源は古く、平氏の落武者不動野次郎左工門が、現在の血ヶ平の下の台地に移住したのが始まりといわれ、その後、人家が増えてから、何らかの理由(強風、火災などの災害等)により家々が氏神社(現在の八幡神社)より上方へ移動したとみられています。

昭和39年、血ヶ平から梨子ヶ平へ至る観光道路新設に伴い、集落下にあった『八幡神社』が上方に遷座されましたが、神社が氏子の家より下に位置していたのは血ヶ平のみで、当初の村は神社下方にあったと推察される所以です。

また、泰澄大師開山と伝わる『浄盛寺』、平安期の『専楽寺』、室町期の『専長寺』も残されています。

三所観音巡礼各寺の観音像(複製)を一緒に安置。観音像の足元には各寺の土が埋められ、お砂踏みができるようになっていきます。

さらに当会では、平成27年末から玉川観音洞窟で「灯りとり」を実施。町の伝統工芸「越前焼」を活かし、上岬地区の歴史を発信しようという初の試みです。灯りとりの陶器は会員や家族が「わづみ館」に集まり手づくりしました。

■加茂神社のいわれ

『加茂神社』には全国各地の加茂神社同様、別雷神わかづみのかみが祀られています。嘉暦3年(1328)の織田剣大明神縁起には、玉川の氏神が年の初めに、嶋一つがいを織田剣大明神に献じたことから「かも神」と名付けられた旨が記されているそうです。境内には、石の神像を安置する別社と観音堂が見られます。



越前岬水仙ランド 水仙畑、日本海、灯台が一望できる絶好のロケーション。『水仙の館』は水仙の原産地・地中海をイメージしたギリシャ風の建物である。



越前岬灯台(平成25年) 平成20年(2008)、耐震対策のため20m北東に移設、建替え。福井県の主要な航路標識で、若狭湾の東角にあり、京都府『経ヶ岬灯台』と対峙している。地上16m、灯高は海面上131m。



越前岬灯台(昭和30年頃) 昭和15年(1940)完成、業務開始。手前の建物は保安官、職員の宿舎で、灯台には灯台長、事務官、用務員の3名が勤務していた。昭和48年(1973)に無人化された。

(1974)には血ヶ平と梨子ヶ平を結ぶ観光道路から『越前岬灯台』へ続く遊歩道が完成し、水仙畑を見渡せる展望台も設置されました。

『越前岬』は古来、敦賀・三国両港の中間にある航海上の要地で、日露戦争と第2次世界大戦時には海軍望楼が設置された軍事上の要衝でした。大正12年頃から灯台誘致運動が始まり、昭和15年(1940)に『越前岬灯台』が完成。現在の灯台は平成20年(2008)に建て替えられた2代目です。

平成4年(1992)、『越前岬灯台』隣にオープンしたのが『越前岬水仙ランド』。水仙の生態等を学べるとともに、1年を通して水仙の観賞ができます。また近年、日本海を背景に広がる水仙畑の風景が絶景といわれ、全国的に注目されてきています。



約250mの遊歩道を抜けると、壮大な滝が現れる。

ひんだん
〈貧谷の滝〉

泰澄大師が修業されたという『越知山』山系の滝。血ヶ平山中を流れる玉川川支川の上流、標高240m地点に雄滝と雌滝があり、手つかずの大自然に包まれた一帯はまさに秘境。現在は、駐車場や遊歩道が整備されています。



雄滝(約50m) 雄滝の右手の山中から落下。途中で霧散しながら玉川川支川に合流する。



雌滝(約30m) 木々の緑に隠れ、玉川川の支川が、苔むす巨大な岩盤を力強く流れ落ちる。

■ 秘境『貧谷の滝』

越知山系の水を農業や生活用水としてきた血ヶ平地区の山中には数多くの滝が見られ、ひと際勇壮な『貧谷の滝』もその一つです。

『貧谷の滝』という名称の由来は定かではありませんが、広い平地がないこの地では、石垣で囲った小さな田しか得られず、「貧しいから」ともいわれてきました。『貧谷の滝』と石垣もまた血ヶ平の歴史を今に伝えています。

■ 水仙+日本海+灯台=絶景

気候温暖な越前海岸一帯は日本水仙の群生地で、昭和40年代に本格的栽培が開始されました。

福井県産の日本水仙は「越前水仙」と呼ばれ、越前海岸が国定公園に指定された昭和43年(1968)には越前町の第1回水仙娘7名が東京へ観光宣伝に向。昭和49年



左右集落(平成13年) 国道305号線開通後は、地元の新鮮魚介を活かした民宿等もでき、賑やかな雰囲気生まれている。



ワカメ干し 懐かしい初夏の風物詩。ていねいに天日干しされたワカメは健康にも良いと人気商品となっている。



鳥糞岩 景勝『呼鳥門』南にあり、ストレートな名称は、昔の人々の大らかさを感じさせる。



左右集落(昭和10年頃)のどかな港の風景。かつての左右集落では、船は漁のみならず、重要な交通手段であった。



神明神社 左右地区唯一の神社。宝暦8年(1758)の村鑑には神明神社が3社あると記されているが、他の2社については未だ不詳である。

漁村の風景 左右地区

■古代の産物、塩とワカメ

春のワカメ漁で知られる左右地区では、平安時代には塩づくりも行われていたとみられ、左右区佐藤文書には、「塩浜を1年、塩3石で借用する」との証文が残されています。

また、玉河浦(玉川集落)などが、庄園領主『氣比太神宮』や『越知山山谷寺』へ納めた年貢目録には、丸塩(塩を布で丸い玉に押し固めて焼いたもの)、海産塩干物等と並んで「若和布」の文字も見られることから、当時の左右浦からも塩やワカメが年貢として納められていたものと考えられます。

なお、延長(923〜931年)の頃までは、左右浦は「左保浦」と称されていたようで、同様の変化は他の地区でも見られます。

■変わらぬ自然と浜の営み

海岸道路(現在の国道305号線)が整備されるまでの左右地区は、他集落との往来にも、風のときは船を使い、時化の時は山越えをしなければならず、玉川にある『上岬小学校』に通う児童たちは約7kmの道を歩いて通学していました。

海岸道路開通で人々の暮らしや町並みが変わる中、変わらないのが『鳥糞岩』と『ワカメ干し』です。『鳥糞岩』は高さ約50mの大断崖で、先端部に生息する海鳥の糞で白く見えることから、この名称で呼ばれるようになりました。

ワカメは今も左右地区の特産品となっており、天日干しされた天然ワカメは希少な高級品です。そして、毎年春行われるワカメ干しの光景は、今の時代だからこそ新鮮な輝きを放っています。



愛染明王洞・水仙廼社 恋愛成就、夫婦円満などにご利益がある神様として地域の人々に親しまれている。



塩吹き岩 波が高い日には豪快に吹き上がり、大自然を間近で感じることができる。



呼鳥門 以前は洞穴の中を国道が通っていたが、道の移動とともに遊歩道が整備され、間近に見ることができるようになった。



千枚田水仙園 最盛期には7000万本が花を咲かせる越前水仙の一大栽培地。棚田オーナー制度も実施されている。



八幡神社 応神天皇(在位270~310年)が祀られている。幟に「三鳥八幡神社」と書かれていたといわれるが、三鳥の意味は不詳である。



梨子ヶ平集落と町道 海岸道路開通前、血ヶ平から越廼村に通じていた唯一の町道は道幅が狭く、荷車の運行もたいへんだった。

伝説と水仙 梨子ヶ平地区

■米から水仙へ、千枚田の変遷

梨子ヶ平の人々はその昔、七つの平(梨子ヶ平・大平・小羽ヶ平・雪ヶ平・竹ヶ平・岩ヶ平・坂ヶ平。なお、梨子ヶ平以外の「平」は「ジャラ」と読まれる)に分かれて暮らしていましたが、江戸時代に、最も大きい梨子ヶ平に集まって住むようになったといわれています。

平坦な農地が少ないため、人々は米の自給自足を目指し水田を開墾。千枚田といわれる棚田を造り上げました。しかし、昭和30年代頃より経済情勢が変化。米の需要が減ったことから、棚田は水仙栽培へ転用され、国内最大の水仙産地となりました。その景観も素晴らしく、平成11年(1999)には「日本棚田百選」に選ばれました。

■大自然が生み出す風景と伝説

『呼鳥門』は、海にせり出した大きな岩が風と波に侵食され洞穴となった自然のトンネルで、越前海岸を代表する景勝地です。その北にある銭ヶ浜駐車場から見えるのが『潮吹き岩』。波が来ると岩の間から海水が吹き上がります。

また、『呼鳥門』の近くに祀られている『愛染明王』は、煩惱と愛欲を向上心に変えて仏道を歩ませるといふご利益を持ち、当地では『恋岬の愛染さま、縁結びの愛染さま』と崇められてきました。

鳥糞台地にある祠に祀られている女水神石像は、西向きに安置しても、東にある六所山ムスシロヤマの方向に向き直ってしまうと伝えられ、六所山頂には女水神様の夫である仏様を祀った石の祠が昭和初年頃まであったといわれています。

玉川観音の言い伝え

〈玉川地区〉



昔、玉川のある漁師が、朝早く船をこいで漁に出ました。ある所まで来て網をあげていると、ぴかぴか光る物がかかっていたいました。

「この光っている物は何だろう。」と、思いながら、引きあげてみると、ぴかぴか光った観音様が上がって来ました。漁師はびっくりして、捨てようか、持って帰ろうかためらいましたが、家に持って帰っても始末が出来ないので、その場に捨てて

しまいました。そして、びくびくしながら家に帰りました。家について、おっかあに海であった出来事を話しました。

「おっかあ、今日、海でな、網をあげているとな、観音様がな、かかっていたんにやわいや。」

そう話しても、おっかあは「海に大事な観音様を捨てる人はいないわい。」

と、言いました。

次の朝、漁師は、また同じ所まで行って網を上げると、また観音様が上がって来ました。その漁師はこう思いました。「これもなにかの縁、村に帰って大切にしておこう。」あわててそれを引き上げて、持って帰りました。

それから、村の人が集まり、どうしようか話し合いました。ある人は、「気味が悪いから、元の所へ置いてこい。」

と、言う人もいました。でも、半分の人には、もつたいないからどこかにまつろうということになり、相談した結果、観音様が上がった真正面のどうくつに置くことになりました。

それが、現在の玉川観音で、今でもたくさんのお参りがあります。

弁天岩

〈玉川地区〉

玉川観音さん洞窟の近くに、弁天さんを祀った小さな祠ほらの建っている

る大岩があります。この土地の人は「弁天岩」と呼んでいます。

むかし、むかし、忍熊命おしのくまのみことの父上であらせられる仲哀天皇ちゆうあいてんおうさまが、船で観音洞窟の沖を敦賀にむかわれたときのことです。今まで静かだった海が急に荒れだし、空は一面に暗くなり、小さな船は木の葉のように揺れ、今にもひっくりかえりそうになりました。

そのとき、海の底から龍の背にのられた観音さまがあらわれ海を静かにしました。天皇さまはたいへんお喜びになり、近くの岩のほら穴に、観音さまを手厚くまつられました。これが今の玉川観音さまです。

このいわれを伝え聞いた玉川の浦人は、龍は弁天さまのかわったお姿であるところから、岩の上に小さな祠を建て弁天様をおまつりしたということ です。



血ケ平の神さま

〈血ケ平地区〉

血ケ平の神社は、八幡神社です。御神体が観音様のお姿をしているので明治時代になるまでは、観音社

と呼んでいました。御神体は十一面観音像と正観音像の二体だそうです。ずつと昔は、十一面観音様だけだったのが、後に正観音様も安置されて二体になったのだそうです。

むかし、むかし、血ケ平の百姓が府中(今の武生市)へ用事があるの で出かけ、用事をすませ帰る途中、八田峠を越して江波まできました。ふとみると川のそばで、少しの間の

抜けた男が、おもちゃをころがして遊んでいました。血ケ平の百姓は、なにをころがしているのやろかと 思って近よつてみると、なんと観音様ではありませんか。

「もつたいないことじゃ、もつたいないことじゃ、なむあみだぶつ……。」ととなえました。これをきいた江波の間抜け男は、きよとんとした顔つきで、

「ほんなら、これ、お前にやるわ。」と、いって、血ケ平の百姓へ投げつけました。百姓はそれを両手でこわれないように受けとりました。大事にふところへいれて家へ帰りました。

床の間へすえて観音様をながめるに、見れば見るほどほんとうに優しいお顔つきで、心のそこから有難く、もつたいなく思われてきました。

「これは、仏さまからの授かりものにちがいない。私一人だけでなく、



血ヶ平村じゅうの者に拜んでもらうようにしよう。」

と思い、さっそく庄屋さんをたずね、この由来をはなし、お宮さんにまつてもらうことにしたのだそうです。

善が浜

〈左右・梨子ヶ平〉

城有海岸に、低い赤茶けた岩が五つ六つ沖の方へのびています。この「ぐり」が、左右と居倉の海境になっています。むかしからの、しきたりで、陸の方は、城有、八俣、梨子ヶ平になっていても、それに沿う海は左右のものです。こんなわけですから、陸地を持つている村は、それに

敬う真心が通じたのだと喜び合ったそうです。

さて、身を清められた命は、左右の頭に案内されて、美しい浜辺に立たれました。この浜の南は鳥糞の岩壁、北は藤かけの絶壁で行手がさえざられて人のふみこむことの出来ない清らかな浜でした。浜の小石は、五色に輝き、海の水は、あくまで清く、澄みとおっていました。命は、「ああ、善なる浜だ。善なる浜だ。」と感歎されました。命のこの言葉を聞いた左右浦の人たちは、この浜を「善な浜」というようになりました。後には、「善が浜」となって、その呼び名が今に伝えられているのです。命は、この「善な浜」で、ひとばん、心をこめて、戦いに勝ち、村を平らげくすることを祈りになりました。

続いてある海で漁業をしたり、舟で

ものを運んだりできるようなしてほしいと、城有村、八俣村の人たちは、江戸の役所や裁判所へなんども訴えましたが、「昔からの、しきたりはおえられない。」としりぞけられてきました。これは「赤岩」のおかげだと左右の人は信じていました。

むかし、むかし、忍熊命が越前海岸に住む牛の首をした化けものを退治するのに、たいへんな苦勞をされました。牛の首の化けものに追いつめられて殺されそうになったことも、なん回かありました。

命は、戦いに勝つには、天においでのなる御先祖の神々をおまつりして、そのお助けをいただかねばな

鳥糞台地の観音さま

〈梨子ヶ平地区〉

梨子ヶ平から細い小道をたどると、うっそうとした鳥糞台地の広場に出ます。そこは「ダモ」の原始林におおわれています。

ここに石づくりの小さな祠があります。石のとびらにはお日さまをあらわす「円」と、お月さまをあらわす「三ヶ月」のかたちがくりぬいてあります。なかをのぞくと、観音さまの石像が蓮のつぼみの柄を持つたれたお姿で、やさしく立っております。

梨子ヶ平では、毎年五月三日になると、村中の人たちが広場へ集まります。それぞれの家でご馳走をつくりそれを持って集まります。観音さまへおまいりをすませ、楽しい野外の宴会が開かれるのです。

らないと考えられました。そして、どこか身を清めるきれいな海と、一晩神様をおまつりするのになさわしい静かで、清らかで、美しい浜辺はないかと、左右浦の人々におたずねになりました。左右浦の頭は、命を赤岩へご案内しました。命は、この赤岩の上で、おからだを、海水で洗われました。そのため、悪い心を持つた人が赤岩にのぼると、かならず、災難にあうといわれるようになりました。此処は、命が、かわりをもたれた聖地ですから、この海や岩を、昔のままに守っていきたいという左右の人々の願いがこんな言い伝えになったものと思われれます。裁判で勝てたのも、左右の人の、命を

この石祠の中におられる観音さまは、いつも六所山の方を向いておられます。いたずらな子どもたちがきて、扉の円い孔へ手をいれて観音さまを西の方へ向けて帰っても、次にいつてみると、ちゃんと東の方を向いておられるそうです。梨子ヶ平の人たちは、いくら向きをかえても、ひとりだに東の方へ向くのだと信じています。

「六所山の頂上には、男の仏さまが祀られているんじや。鳥糞の観音さんと六所山の男の仏さまは夫婦じゃやそうな。おたがいに無事で達者でいるかと案じていらっしやるそうな。ほれで六所山の仏さまは西を、鳥糞の観音さまは東を向いておられるんじや。」と、村の人は話してくれました。





参考文献

「越前町史 上・下巻」
 (昭和52年6月・12月発行)
 編集:越前町史編纂委員会
 発行:越前町長 島田徹也

「ふるさと今昔」
 (平成14年3月発行)
 編集:越前町教育委員会
 発行:越前町

「平成14年越前町勢要覧」
 (平成14年5月発行)
 発行:越前町役場総務企画課

「越前町町制50周年記念誌
 50年の輝跡」
 (平成16年11月発行)
 発行:越前町役場総務企画課

「貧谷の滝と石垣の見える
 風景」
 (平成27年4月)
 佐々木英治

「越前町のむかし話」
 (昭和60年10月発行)
 編集:越前町民話編集委員会
 発行:越前町教育委員会

「福井県選定
 福井ふるさと百景」
 福井県